VPA-03(2020)

Frasyrを用いたVPA:実践編② ~チューニングありVPA~

• 二段階法,選択率更新法,全F推定法の実行方法の紹介



動画作成者 漁業情報解析部 宮川光代 (mmiyagawa@affrc.go.jp)

Frasyrを用いたVPAの実践(チューニングありVPA編)

※ここは二段階法,選択率更新法,全F推定法に共通の手順

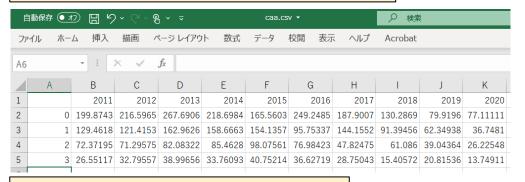
1) 基礎的な設定

- Rのインストール (インストール方法は動画R-01参照)
- Rstudioのインストール (必須ではないですが、インストールすると便利:インストール方法も動画R-01参照)
- Frasyrのインストール方法は https://github.com/ichimomo/frasyr に従って下さい.(動画Tool-03を参照)
- インストール後、library(frasyr) でパッケージを呼び出しすることで使えるようになります.
- 2) VPAに用いるデータファイルの作成
- 色々やり方はありますが、今回は、<u>5つのcsvファイル</u>を作成してRで読み込むようにします
 - 1. caa.csv ---年別年齢別漁獲尾数のデータファイル
 - 2. waa.csv ---年別年齢別体重のデータファイル
 - 3. maa.csv ---年別年齢別体重成熟率のデータファイル
 - 4. M.csv ---年別年齢別自然死亡係数のデータファイル
 - 5. Index.csv --- 資源量指標値(CPUEや資源量指数など)のデータファイル
 - この他にも,必要に応じて次のようなファイルを生成する:
 - 6. maa_tune.csv ---チューニングに使う成熟率が異なる場合
 - 7. waa_catch.csv ---資源量を計算するときと、漁獲量を計算するときとで年別年齢別重量が異なる場合

5つのcsvファイルの中身の例

● 例:0-3+歳まで,2011-2020年までのデータで,indexは6つの異なる指標がある場合

caa.csv: 年別年齡別漁獲尾数(↓)



waa.csv: 年別年齡別体重(↓)



										_	
自動保存 ① 打 日 り~ (~ 多 ~ マ						maa.csv ▼					
ファー	イル ホー	ム 挿入	描画 /	ページ レイアウ	ト 数式	データ	校閲 表示	マルプ	Acrobat		
H14	ļ	· :	× <	fx							
4	Α	В	С	D	Е	F	G	Н	1	J	K
1		2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	1	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
4	2	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
5	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6											

│M.csv : 年別年齢別自然死亡係数(↓)

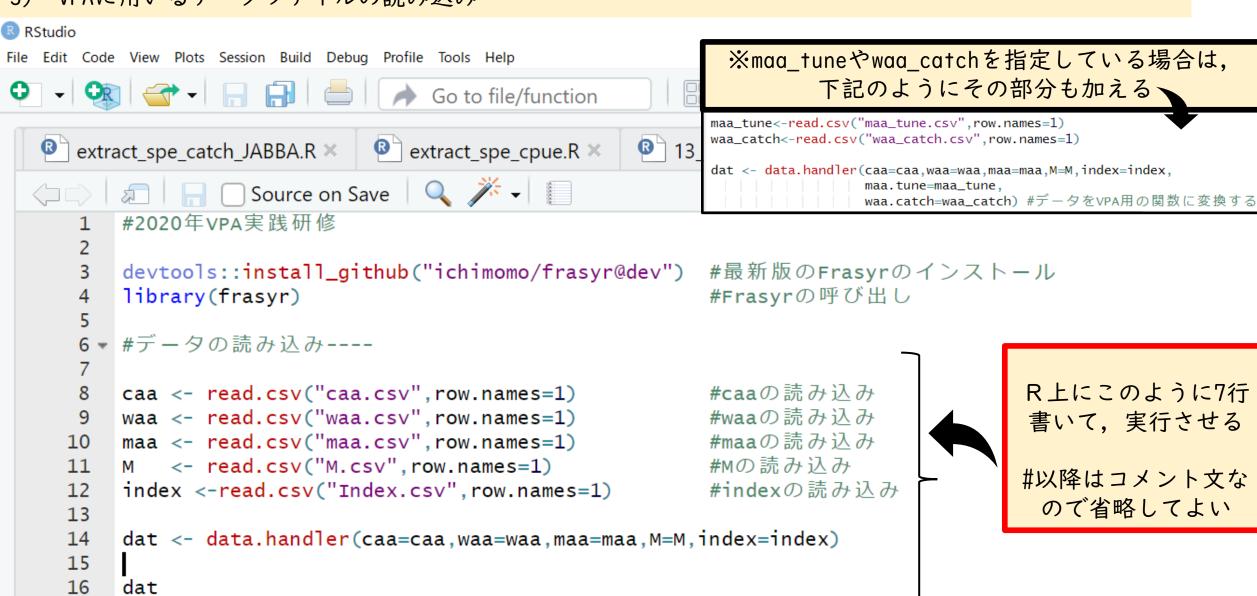


Index.csv: 6つの異なる資源量指標値(↓)



3) VPAに用いるデータファイルの読み込み

17



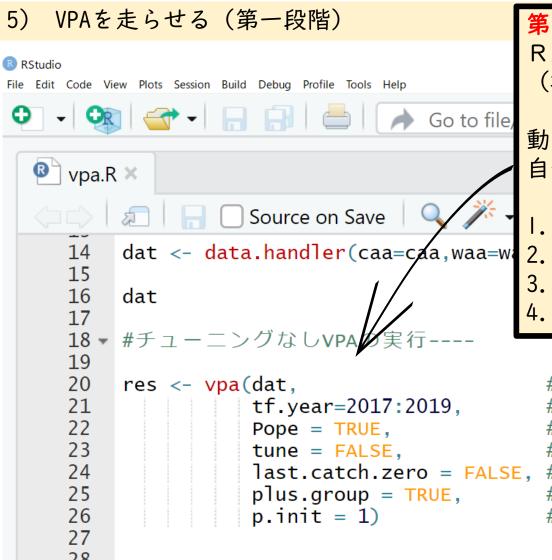
データ読み込みの確認

```
データがきちんと読み込まれたことの確認
  14
  15
     #maa_tune<-read.csv("maa_tune.csv",row.names=1)</pre>
     #waa_catch<-read.csv("waa_catch.csv",row.names=1)</pre>
  17
     dat <- data.handler(caa=caa,waa=waa,maa=maa,M=M,index=index)</pre>
  19
  20
     dat
  21
  22
      T datと書いて実行する
  24
  25
  26
  27
  28
datの中身が表示される
   $caa
   $maa
   $waa
   $index
   ($maa.tune, $waa.catch)
                                                         ≣ List - | @ -
が与えたデータと一致しているか確認
                                                     Q
             一致していればOK
                                                               Q
                  6 obs. of 10 variables
index
                  4 obs. of 10 variables
                  4 obs. of 10 variables
maa
                  4 obs. of 10 variables
waa
                                                                    NULL
                                                                    $catch.prop
```

```
71.29575 82.08322 85.46280 98.07561 76.98423 47.82475 61.08600 39.04364 26.22548
                   38.99656 33.76093 40.75214 36.62719 28.75043 15.40572 20.81536 13.74911
$maa
 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020
0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3
      0.8 0.8 0.8 0.8 0.8 0.8 0.8 0.8 0.8
$waa
       2011
                2012
                          2013
                                              2015
                                                       2016
                                                                 2017
                                                                           2018
                                    2014
0 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254 0.03583254
1 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471 0.16698471
2 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750 0.34124750
3 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731 0.50836731
       2020
0 0.03583254
1 0.16698471
2 0.34124750
3 0.50836731
$index
                             2013
                                                  2015
                                                            2016
                                                                       2017
                  2012
                                       2014
                                                                                  2018
1 1719.079998 1602.803898 1325.969967 1449.228810
                                            853, 900375 1402, 376696 1391, 297808 753, 3395461
                       900.000000 1000.000000
2 1200.550000 1100.000000
                                             600.000000
                                                       700.000000
                         1.305684
    1.429189
               1.451814
                                    1.112570
                                              1.066373
                                                         1.497432
              1.351814
                         1.705684
                                    1.112571
                                              1.066373
                                                         1.297432
5 1888.822675 1605.954237 1392.561657 1687.527624 1000.919915 1497.384805 1456.419877 856.6915698
6 1676. 365753 1554. 338761 1267. 787659 1048. 131268 516. 602688 1040. 247162 1222. 319546 720. 3846515
         2019
  552.8875843 776.5377895
  600.0000000 700.0000000
    0.6246666
              0.8609907
    0.8246666 1.0609907
5 1038, 9088640 890, 8244353
6 504.8837941 442.2305584
$M
 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2013 2019 2020
0 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 ().4 0.4
0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4 0.4
$maa.tune
NULL
$waa.catch
```

NULL

VPAの実行(チューニングありVPA編:二段階法)



第一段階:チューニングなしVPAを行う R上にこのように7行書いて,実行させる (#以降はコメント文なので省略してよい)

動画VPA-01『frasyrを用いたVPA:概要編』で解説しているように, 自分のしたい解析に合わせて以下のことを指定する:

- I. 最終年の漁獲係数(F)はどの年の平均に等しいとするか
- 2. Pope近似式を使うか、Baranov方程式にするか
- 3. チューニングはするのかしないか
- 4. 最高齢はプラスグループなのか

```
(\text{dat}, modes) #VPAを行うデータ  
(\text{tf.year=2017:2019}, modes) #ターミナルFをどの年の平均にするか  
Pope = TRUE,  #Popeの近似式を使うならTRUE, Baranovを用いるならFALSE  
(\text{tune} = \text{FALSE}, modes) #チューニングはしないのでFALSE (デフォルトはFALSE)  
(\text{last.catch.zero} = \text{FALSE}, modes) #最終年の漁獲尾数が全部0の場合はTRUE(デフォルトはFALSE)  
(\text{plus.group} = \text{TRUE}, modes) #最高齢はプラスグループか否か(デフォルトはTRUE)  
(\text{p.init} = 1) #ターミナルFに与える初期値
```

ma

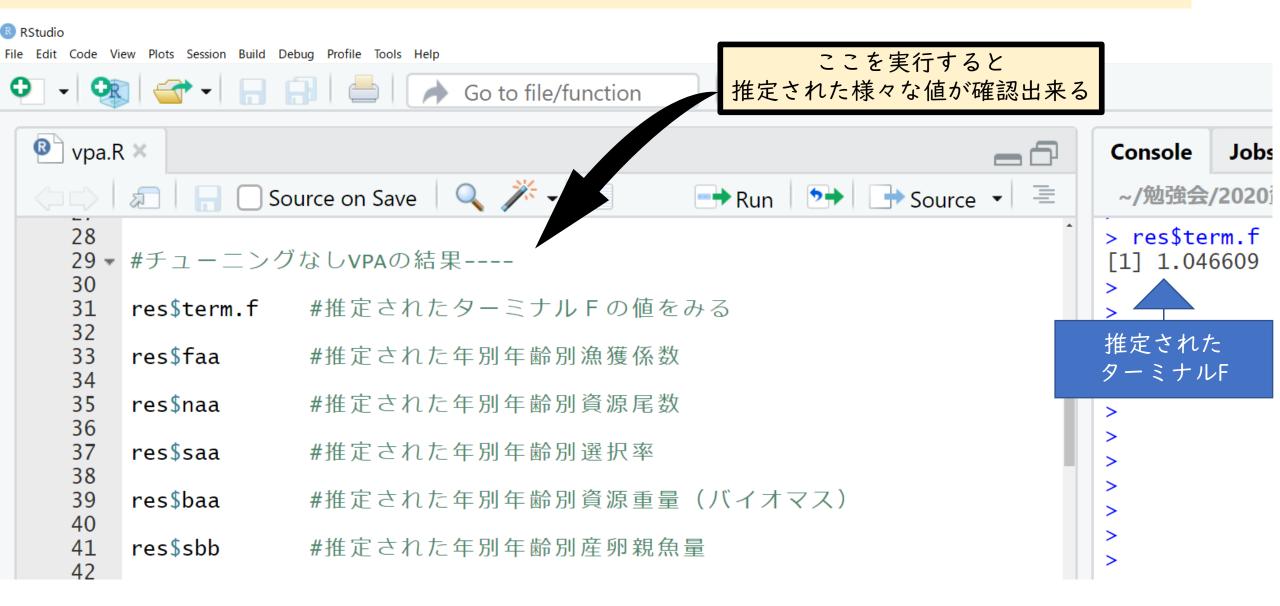
ir

\$i

Γ1

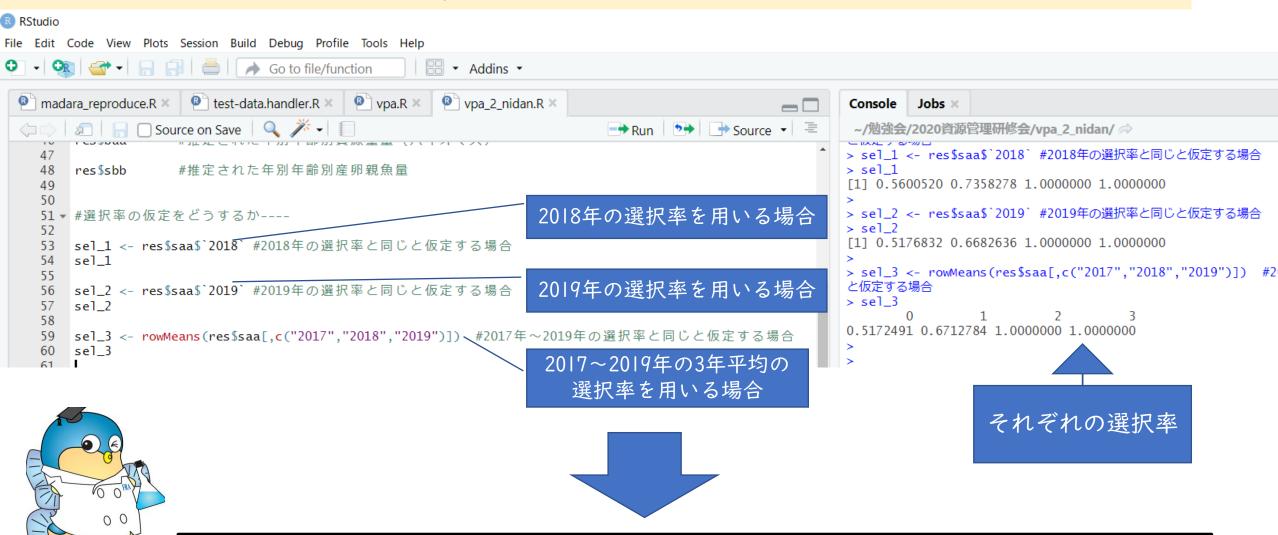
VPA第一段階の結果をみる (二段階法)

6) VPA第一段階目の結果をみる



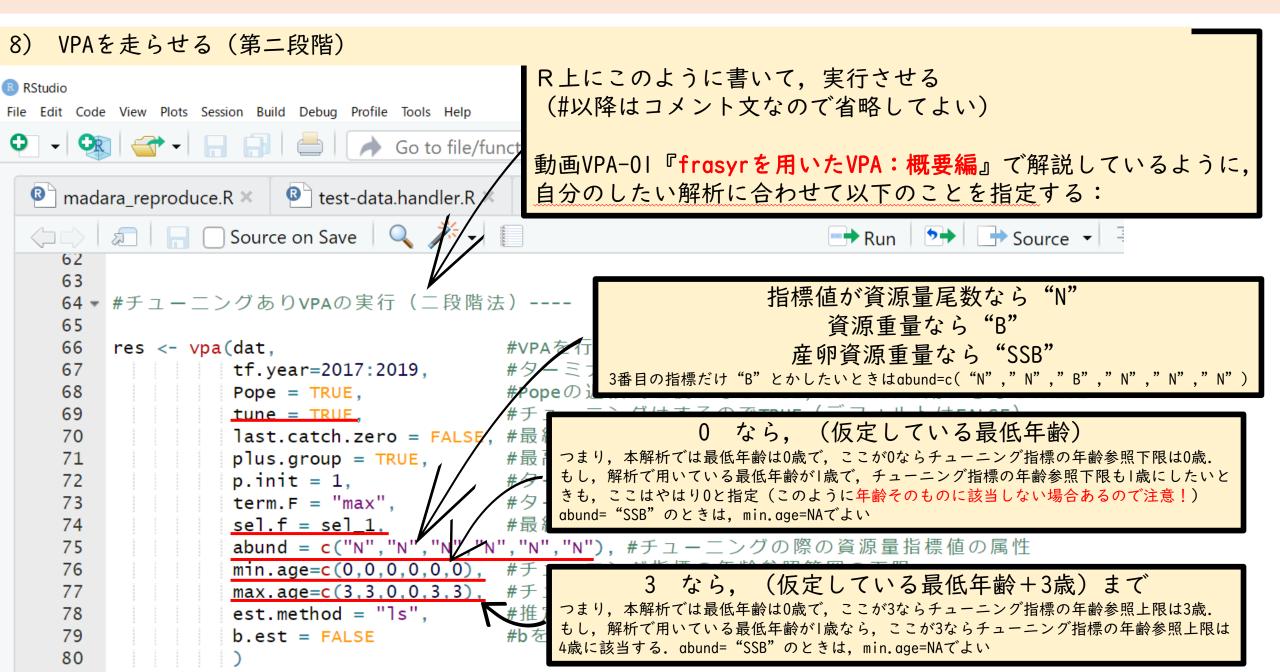
二段階目の準備:どの年代の選択率を仮定するか

7) 二段階目のチューニングVPAに向けて、ターミナルFを推定するための選択率の仮定を決める



ここで指定した選択率の仮定を用いて、今度はチューニングVPAを行う

二段階目であるチューニングVPAの実行

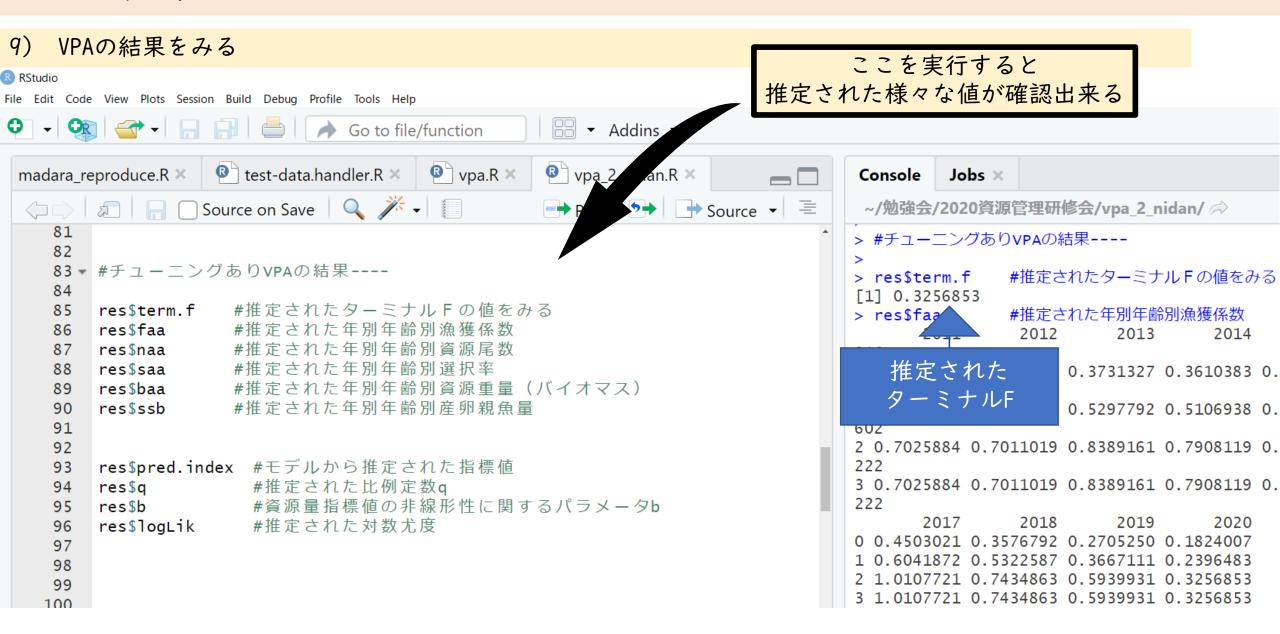


二段階目であるチューニングVPAの実行 (続)

8) VPAを走らせる(第二段階) (続)

```
RStudio
File Edit Code View Plots Session Build Debug Profile Tools Help
                                                 ▼ Addins ▼
                          Go to file/function
                   test-data.handler.R × P vpa.R ×
    madara reproduce.R ×
                                                <sup>®</sup> vpa_2_nidan.R ×
              Source on Save
                                                                    → Source →
                                                             Run
    62
    63
    64 ▼ #チューニングありVPAの実行(二段階法
                                            推定方法:最小二乗法なら"Is", 最尤法なら"mI"
    65
                                                      上記の方法は、指標値の対数をとっている.
    66
                                        (例外として,対数をとらない指標値の絶対値の最小二乗法のオプションもある→ "Is_nolog"
        res <- vpa(dat,
    67
                 tf.year=2017:2019,
    68
                                     #Popeの近似式を使うならTRUE, Baranovを用いるならFALSE
                 Pope = TRUE,
                                     #チューニングはするのでTRUE(デフォルトはFALSE)
    69
                 tune = TRUE,
                 last.catch.zero = FALSE, #最終年の漁獲尾数が全部0の場合はTRUE(デフォルトはFALSE)
    70
                                     #最高齢はプラスグループか否か(デフォルトはTRUE)
    71
                 plus.group = TRUE,
                                      ターミナルFに与える初期値
    72
                 p.init = 1
    73
                 term.F = "max",
                                     #ターミナルFの最高齢だけ推定
    74
                 sel.f = sel_1
                                     #最終年の選択率の仮定を指定
    75
                 abund = c("N","N","N")
                                    |","N","N"), #チューニングの際の資源量指標値の属性
                                     #チューニング指標の年齢参照範囲の下限
    76
                 min.age=c(0,0,0,0,0,0)
                 max.age=c(3,3,0,0,3)
    77
                                     #チューニング指標の年齢参照範囲の上限
                 est.method = "ls"
                                     #推定方法(1s=最小二乗, m1=最尤法)
    78
                                     #bを推定するか否か
    79
                 b.est = FALSE
    80
```

VPAの結果をみる



おまけ:resの中に入っているオブジェクト

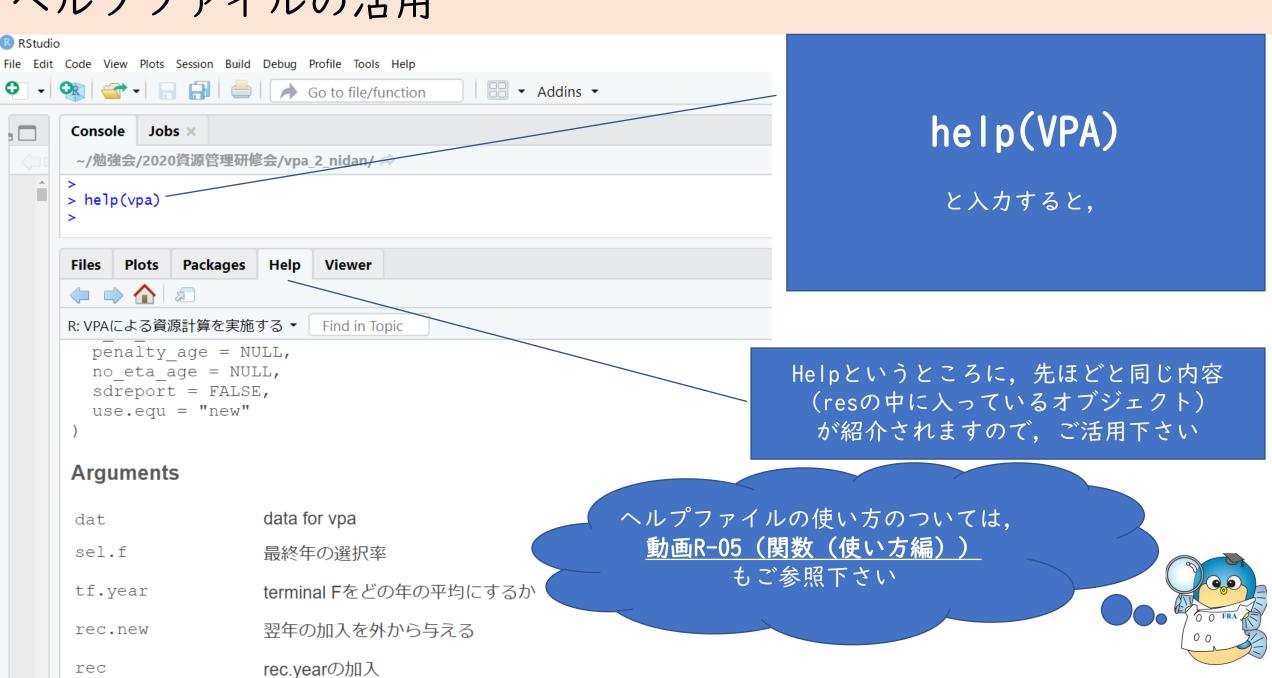
前のスライドで紹介した代表的な結果以外にも、様々な情報を得ることが出来ます

res\$input 解析に用いたデータや仮定 res\$term.f 推定されたターミナルF res\$np 推定されたターミナルFの数 最適解における目的関数の値(合計) res\$minimum res\$minimum.c 最適解における目的関数の値(個々) res\$logLik 負の対数尤度 res\$gradient 最適解での傾き res\$code 最適化法から返されるコード (どのような理由で最適化が停止したのかがわかる) 推定されたq(資源量指標値の比例定数) res\$q 推定されたb(資源量指標値の非線形性) res\$b res\$sigma 資源量指標値の分散の平方根 res\$convergence 解が収束していれば I, そうでないと0 res\$message 最適化に関する注意(あれば) res\$hessian ヘッセ行列の値 res\$Ft 最終年のFの平均値 res\$Fc.at.age Fcurrentで指定した年における平均のF res\$Fc.mean Fc.at.ageを平均したもの res\$Fc.max Fc.at.ageの最大値 res\$last.year vpaを計算する最終年を別に指定した場合

res\$Pope popeの近似式を用いたか否か res\$ssb.coef 産卵親魚量の計算時期 (年始めなら0,年中央なら0.5,年最後なら1) res\$pred.index 推定された資源量指標値 res\$wcaa caa*waa.catch res\$naa 推定された年別年齢別資源尾数 res\$faa 推定された年別年齢別漁獲係数 res\$sbaa 推定された年別年齢別漁獲係数 res\$saa 推定された年別年齢別資源重量 res\$ssb 推定された年別年齢別産卵親魚量 res\$saa 推定された年別年齢別選択率

※この情報はヘルプファイル(後述)でもみることが出来ます.

ヘルプファイルの活用



VPAの結果を可視化する(I)

※ 詳しくは、動画VPA-02「チューニングなしVPA」を参照

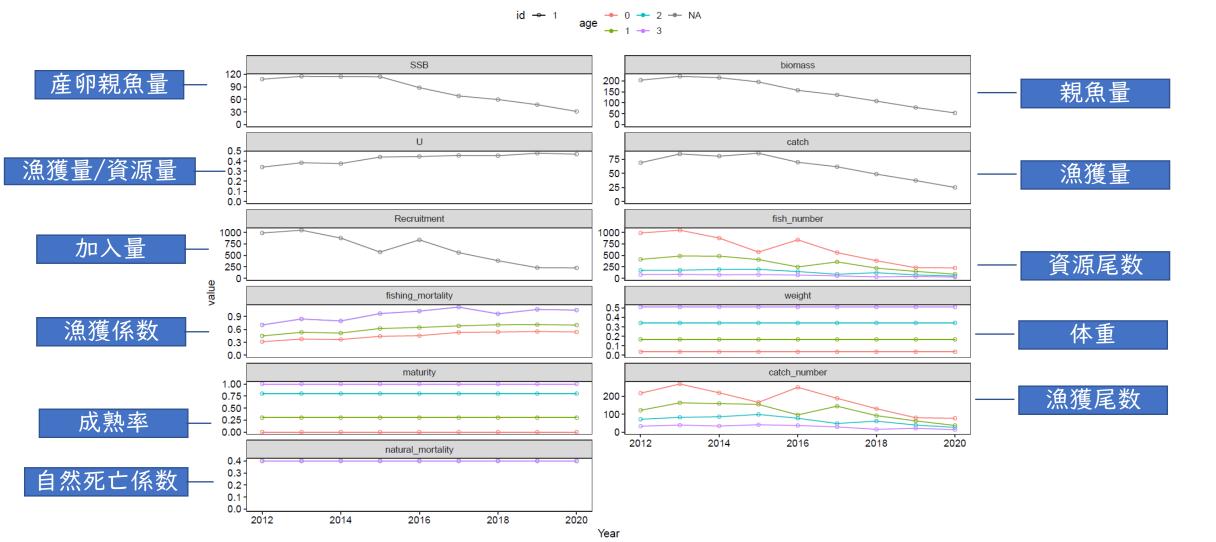
IO) VPAの結果をプロットしてみる

#VPAの結果を可視化する

plot_vpa(res, plot_year=2012:2020)

R上にこのように書いて、実行させる

2012年~2020年までの様々な結果をプロット(下図)



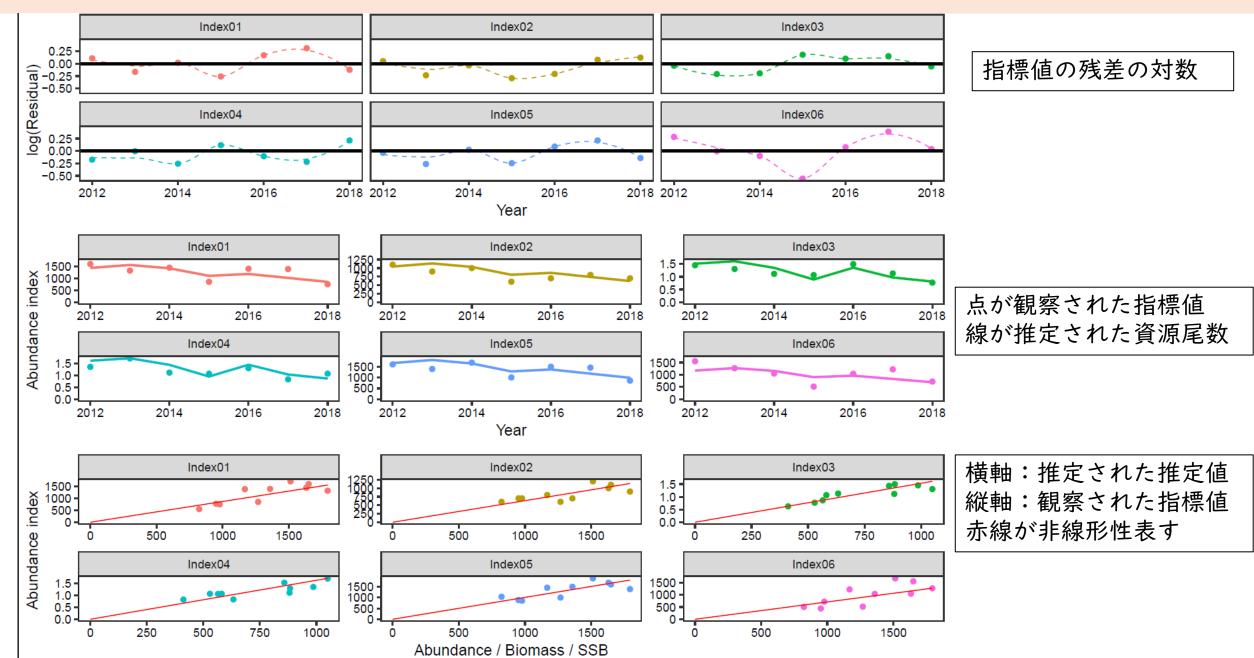
VPAの結果を可視化する(2)

11) 資源量指標値への当てはまりの単純な可視化

```
#VPAを行うデータ
66
   res <- vpa(dat,
            tf.year=2017:2019, #ターミナルFをどの年の平均にするか
67
            Pope = TRUE,#Popeの近似式を使うならTRUE, Baranovを用いるならFALSEtune = TRUE,#チューニングはするのでTRUE(デフォルトはFALSE)
68
69
            last.catch.zero = FALSE, #最終年の漁獲尾数が全部0の場合はTRUE(デフォルトはFALSE)
70
            plus.group = TRUE, #最高齢はプラスグループか否か(デフォルトはTRUE) p.init = 1, #ターミナルFに与える初期値 term.F = "max", #ターミナルFの最高齢だけ推定
71
72
73
74
            sel.f = sel_1.
                           #最終年の選択率の仮定を指定
            abund = c("N", "N", "N", "N", "N", "N"), #チューニングの際の資源量指標値の属性
75
76
            min.age=c(0,0,0,0,0,0), #チューニング指標の年齢参照範囲の下限
            max.age=c(3,3,0,0,3,3), #チューニング指標の年齢参照範囲の上限
77
            est.method = "ls", #推定方法(ls=最小二乗, ml=最尤法)
78
            b.est = FALSE, #bを推定するか否か
79
                                #チューニングに使った資源量指標値に対するフィットのプロット
80
            plot = TRUE,
            plot.year =2012:2018
                                 #上のプロットの参照年
81
82
```

この2行を加えて実行すると, 次のスライドのような図が生成される

資源量指標値への当てはまり



この続きの、VPAのモデル診断に関しては,

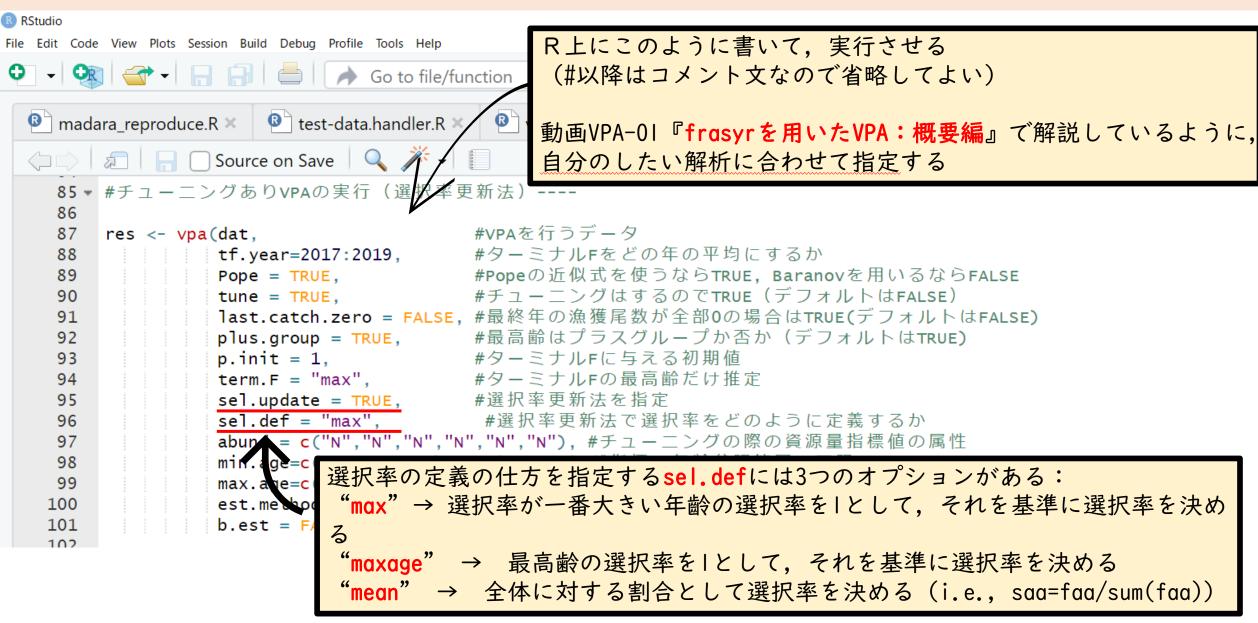
動画VPA-04:VPAのモデル診断 概要編

動画VPA-05: VPAのモデル診断 実践編

を参照して下さい.

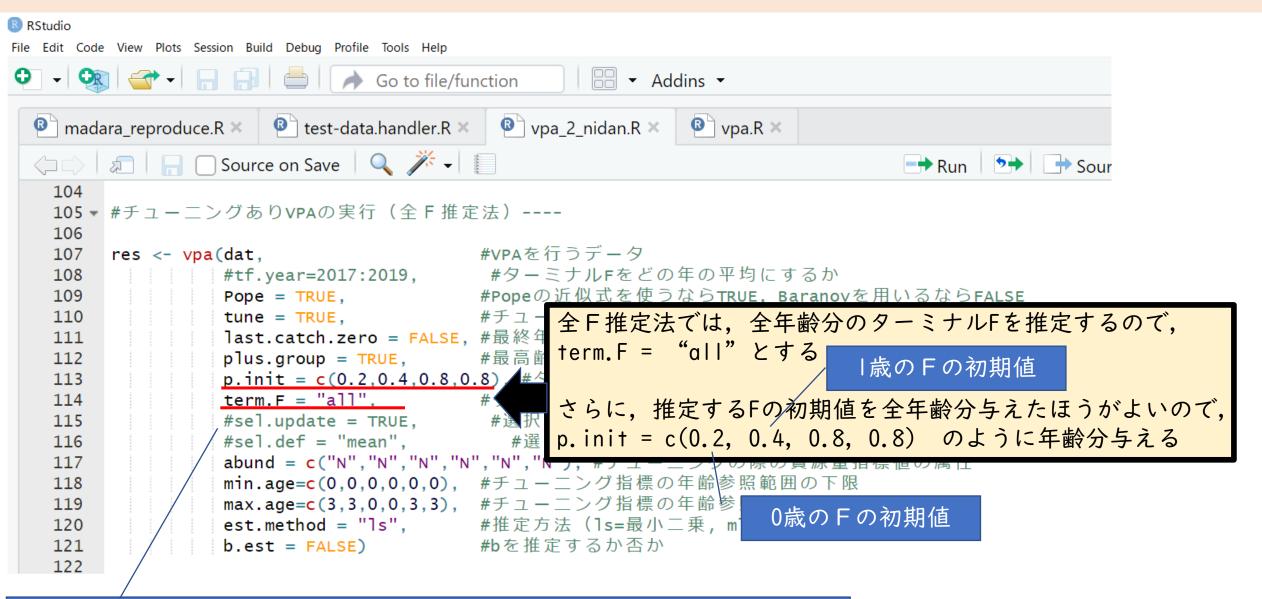


選択率更新法の場合の実行方法



※実行後の結果の見方やプロットなどは先ほどの二段階法と同じ

全F推定法の場合の実行方法



選択率更新法で必要だったsel.updateやsel.defの設定は必要ないので消す

※実行後の結果の見方やプロットなどは先ほどの二段階法と同じ

おまけ:vpa関数で指定できるその他のこと

今までのスライドで紹介した実行方法の設定は、基本的なものであり、その他にも様々な状況に合わせて、設定を変えることが出来ます。ここに役に立ちそうないくつかのvpa関数の引数を紹介しておきます

引数	意味
rec.new	last.catch.zero=TRUEのときに,翌年の加入を外から与える
rec	rec.yearで指定した年における加入
rec.year	加入を代入する際の年
p.pope	Popeの近似式にした場合, どこで漁獲が起こるか(デフォルトは0.5)
link	資源量指標値がどういう関係式で資源量と関係しているかを調整 (link= "id" だったらlogをとった指標値がlogをとった資源量に比例, link= "log" だったらlogをとった指標値がlog(log(資源量))に比例)
p.m	Popeの近似式で、チューニングの際にどこで漁獲が起こるかを指定 (デフォルトは0.5で年の真ん中)
index.w	チューニングに用いる指標の重みを外部から与える
use.index	"all"だったら全ての資源量指標値を用い, c(2:3)だったら最低齢+1歳~最低齢+2歳まで使用
alpha	最高齢と最高齢-1のFの比 F(a) = alpha*F(a-1)
stat.tf	最終年のFを推定する統計量,"mean"だったら平均値,"median"だったら中央値
no.est	TRUEならパラメータ推定せず,初期値として与えたFのもとでvpaを行う(Excelとの比較に便利)

おまけ:vpa関数で指定できるその他のこと(続き)

引数	意味
q.fix	資源量指標値の比例定数qを外部から与える
b.fix	資源量指標値の非線形性に関するbを外部から与える. 指標値の2番目と5番目だけbを I にして, あとは推定させたいならb.fix=c(NA,I,NA,NA,I,NA)と指定
optimizer	最適化の手法に何を使うか. デフォルトは "nlm". "nlminb" なども指定できる
lambda	ridgeVPAを行う際のlambda(ペナルテイーの大きさ)の指定

help(VPA)で同様の情報が参照できます

	"s" = {最終年の年齢aのs-(tf.yearで指定した年のa歳の平均のs)} のbeta乗の和)
TMB	TRUEにするとTMBを用いて高速計算行う. (事前にuse_rvpa_tmb()を実行) 全F推定法, POPE=TRUE, alpha=I, 途中でプラスグループが変化しない場合のみのときに使用可能
sigma.constraint	sigmaパラメータの制約.使い方としては,指標が5つあり,2番目と3番目の指標のsigmaは同じとしたい場合はc(1,2,2,3,4)と指定する
eta	ridgeVPAを行う際にFのpenaltyを分けて与えるときにeta.ageで指定した年齢への相対的なpenalty(0~1)
eta.age	ridgeVPAを行う際にFのpenaltyを分けるときにetaを与える年齢(0 = 0歳(加入),0:1 = 0~ 歳)

これで,チューニングありVPA実践編(動画VPA-03)の解説は終わりです こちらでご紹介したデータやコードはファイル名:vpa_03_data_codeにあります. ありがとうございました



